戯れる蝶

藍原柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戯れる蝶

【Ｎコード】
Ｎ２３０２ＢＡ

【作者名】
藍原柚希

【あらすじ】
町と海を隔てる巨大な『壁』がある町で育った少年。彼は、毎日その『壁』に上り、夕焼けを見るのを日課としていた。しかしある日、少年は『壁』の上で、黒髪をなびかせた少女に出会う。その瞬間から、少年の非日常は、始まった――。
行き当たりばったりで書いた処女作です。異世界に少年が連れていかれます。途中でヒロイン視点が入ります。文章やストーリーに稚拙なところがあると思いますが、ご了承ください。

第一話

僕の住んでいる街には、高い壁がある。僕が住んでいる街は、海沿いの町なんだけど、まるで町と海を隔てるように、コンクリートでできた『壁』がそびえたっているのだ。

といっても、防波堤じゃない。その『壁』は幅百メートルほどで、まるで壊されたベルリンの壁のように両端がスパッと途切れている。毎日夕方になると、夕日の光を『壁』が遮り、町に長い影を落とす。明らかに邪魔だから、誰か町民や組合の人たちが取り壊し運動でもしそうなものだけど、親に聞いた限り、そのような話はないそうだ。ずっと昔、ある日突然できたといわれているけど、僕は信じない。

さて、この『壁』が、僕のお気に入りの場所である。正確に言えば、『壁』の上だ。巨人が建てた間仕切りのようなこの『壁』には、鉄製の梯子がついている。　僕は放課後、学校が終わるとこの梯子を上るのがほぼ日課となっている。

理由は、『壁』の上から見える景色だ。

高いビルも、電柱なんかもないまっさらなキャンバスの中に、ただ夕日がゆっくりと沈むさまが描かれるのである。僕はそれを、夕日の光が完全に消えてなくなるまで、じっと見つめる。

『壁』の厚さは、三、四メートルほどで、転落防止用の柵も何もない。正直に言うとかなり危険なのだが、それでも僕は毎日来ずにはいられない。母親がこの事実を知ったら、卒倒するだろう。こんなところに登ろうとする奴なんか、後にも先にも僕くらいだろう。

――そう、思っていた。

その日は、散々な一日だった。どのくらい散々だったかというと、まず、一時間目に帰ってきた期末テストの赤点にやられ、次に、昼休みの弁当が日の丸弁当で（これには昨夜の夫婦げんかが影響したものとみられる）、そして放課後には親友に掃除当番を押し付けら

れた（「悪い、今日デートなんだ」）。
おかげで、僕がいつものように『壁』についたのは、空が真っ赤な夕焼けに染まったころだった。自転車を梯子のすぐそばに止め、早速『壁』を登りにかかる。手を伸ばして鉄の棒をつかみ、体を引き上げる。そして次の段に足をかける。
登り切ったころには、息が上がっていた。卓球のピンポン玉のような太陽が、今まさに目の前で沈もうとしている。
「ん？」
僕は違和感を抱き、夕日から目をそらした。視界にオレンジ色のまっすぐな地面が入る。それはいつものことだ。イレギュラーなのは――
僕がいる場所から数十メートル離れたところに、誰かがいたことだった。
「……」
僕は考えた。僕は中学生のころから、『壁』に上ることを日課としてきた。今年で、三年目にあたる。これまで、幸か不幸か、友達に知られて不審がられることも、また、大人に見つかって怒られることもなかった。そんな歴史の中で、『壁』の上で人に会うなんてことは、僕にとって黒船来航のようなものである。
声をかけるべきか否か。
こんなところにわざわざ来るくらいだから、奇人変人のたぐいである可能性も否定できない。いや、僕は例外としてさ。
そんなことをつらつらと考えているうちに、相手のほうがこっちに気付いたらしい。夕闇の中を、こちらに向かって歩いてくる。
「こんばんは」
目の前に立っているのは、小柄な少女だった。長い黒髪を垂らし、服も真っ黒だ。まるで喪服だな。
「こんばんは。君、何してるの？」
「あなたこそ、何しにここに来たの？」
質問に質問で返される。

「何って、夕日を見に来たんだよ。ここは僕のお気に入りなんだ」
「ふーん。まあ、ここ、眺めいいものね」
そういうと少女は夕日のほうにちらりと目をやった。もう半分沈みかかっている。
「でも、ここ危ないから登らないほうがいいと思うけど」
「君だって登っているじゃないか」
そこで少女は、僕のほうに向きなおり、にっこりと笑って言った。
「私は、約束だから」
「は？」
「もう、帰るわ。あなた、名前は？」
「……河野良介」
「良介君か。私は、ミカ。じゃあね」
そういうと、彼女はすたすたと梯子のほうへ歩いていく。馬鹿みたいに突っ立って見送る僕。
ひらりと彼女の姿が見えなくなった後で、そういえばあの服装は魔女みたいでもあったなと思った時には、もうあたりは完全に闇に包まれていた。

ミカという侵入者に出会った後も、僕は毎日『壁』に通い続けた。長い梯子を上ると当然のように彼女はいて、『壁』のふちに腰掛け、足をぶらぶらさせていた。

「高校どこ？」
これは、僕がミカに聞いた当たり障りのない質問のはずだった。
「通ってないわ」
ミカは平然と言った。さらに続ける。
「ちなみに働いてもないし」
「じゃあ……ニート？」
「そうなるわね」
ミカは夕日を見たままだ。道理で、いつも僕より先に『壁』に来

ていると思った。
「毎日何してるの？」
「テレビ見たり、本読んだり、ネット見たり」
つまり暇なんだな。ちなみに、ミカは今日も真っ黒なワンピースだった。夏休みも迫った今日、見ているだけで暑苦しい。
「あなたはT高校でしょ？」
「うん」
僕が通っているのは、頭がいいとは言えないし、かといって特段悪いってわけでもない、言ってしまえば平凡な県立高校だった。
「学生生活はどう？」
「どうって言ってもなあ……」
この間は学校のパソコンを誰かがクラッシュさせたとして、少し騒ぎになったり、昨日は親友の田中がクラスで最低点を記録したりしたけど、それ以外にこれといって目立ったこともない。野球部は甲子園出場を見事に逃していたし。
「平凡だよ」
この一言に尽きる。
「いいじゃない、平凡」
ミカは特に関心のない様子で言った。
僕は以前はぐらかされた質問をもう一度ぶつけてみた。
「ねえ、なんでミカは、ここに来ているの？」
「前にも言ったじゃない、約束だって」
「だから、何の約束？」
ミカは、僕のほうを向いていった。
「ここで待っていればね」
そして、ミカはなぜか言葉をためた。
「お父さんに、会えるのよ」
「はぁ？　君のお父さん、漁師？」
するとミカは、くすくす笑って、
「そのようなものよ」

と言った。
「さ、帰りましょ」
あたりはすでに真っ暗だった。

高校生活で二回目の、夏休みがやってきた。夏休みが来ても、僕は相変わらず毎日『壁』に通っていた。変わったのは、制服から私服になったことぐらいだ。
ミカは、世間が夏休みになろうが冬休みになろうが関係ない、と言わんばかりに、カラスの濡れ羽色をしたワンピースを着ていた。
さて、今日、僕には気が重いことがあった。ミカは、そんな僕の様子に気づいたのか聞いてきた。
「なんか今日の良介君、ピクニックの前日に雨が降るのか降らないのか心配している子どもみたいな顔してるよ」
僕は少し言いよどんで、
「……あのさ」
「うん」
「今度町内会の祭りがあるのは知ってる？」
「ええ」
「一緒に行かない？」
ミカの顔が、固まった。
「……それって、デートに誘ってる？」
「言うなっ、恥ずかしいから！」
僕は頭を抱えた。
すると、ミカの笑い声が聞こえてきた。
「いいわよ」

約束したのは、午後七時だった。待ち合わせにはいささか遅い気がするが、ミカは『壁』で夕日を見送ってから来るという。僕は、今日は行かなかった。何となく、普通に待ち合わせをしたかったのだ。今日くらいは。

祭り会場の近くのコンビニで僕は待った。そして目の前に現れたのは、もしかしたら浴衣かもという僕の予想を裏切って、闇に溶けるような真黒なワンピースを着た、ミカだった。考えたら浴衣での壁を登るのは無理か。
「待った？」
「十分ほど」
そう、十分、とミカは意味もなく繰り返し、僕のほうを向いて言った。
「じゃ、行きましょ」

祭りの会場は、なかなか盛況だった。ただ、町内会の祭りなので、規模が小さいのが残念なところだ。
「何か食べたいものある？」
僕はミカに聞いた。
「うーんと、綿菓子」
僕らは綿菓子屋へ向かった。
と、思わぬ奴らに出会ってしまった。
「おう、なんだ、河野じゃん」
目の前にいたのは、田中と、クラスの一味三人だった。僕は平静を装って言う。
「なに、男四人で祭り？」
「うっせーな。お前こそ誰だよその娘。彼女がいたなんて初耳だぞ」
「彼女じゃないよ。ただの友達。ミカっていうんだ。ミカ、こっちは学校の友達」
「ミカちゃんかー。すっげーかわいいじゃん」
田中の隣にいた有野が言った。飲んでねぇかコイツ。
僕は、田中に目くばせした。田中は正確に僕の意思をくんでくれたようで、
「まあ、若い二人の邪魔をするのは、男の風上にも置けねぇな。というわけで、俺らは適当に店冷かして帰るからよ、二人ともよろし

くやってくれ」
田中は、
「ミカちゃーん、今度メアド教えてねー」
と未練がましく言う有野を引きずり、その場を立ち去ってくれた。
そういえばミカは携帯を持っているのだろうか。
「面白い人たちね」
とミカは微笑みながら言った。
「そうだな」
面白いには違いない。
「じゃあ、綿菓子屋、行こうか？」

結局、ミカは綿菓子、たこ焼き、リンゴ飴、チョコバナナを食べた。
「……食べすぎじゃない？」
「だって、目に入るたびに食べたくなっちゃって」
太ったミカなんて、想像したくない。ミカは金魚すくいで獲った金魚を嬉しそうにつつき、
「ふふ、かわいい」
と言った。

そうして、なんだかミカの食べる顔ばかりが目に焼き付いた夏祭りは終わった。クラスの男らには街で会うたびに冷やかされたが、うらやましがられることが多かった。
「だって、スゲー美人なんだろ？」
そうかな。

さすがに毎日会うと話題はあまりなく、夏休みの間中、僕とミカは『壁』の上では黙って夕日を眺めているような感じだった。僕はミカが隣にいればそれで十分だったし、ミカもそうだったと思う。
その日も、夏の暑い中、僕とミカは『壁』の上で夕日を見送って

いた。
と、ミカが、突然、口を開いた。
「ねぇ、良介君」
「何？」
「私、実はこの町からいなくなっちゃうんだ」
「……引っ越し？」
僕の心臓が早鐘を打ち始めた。
「うん、そんなものかな」
「メールするよ」
ミカが首を振った。
「ううん、駄目なの」
ぽつりとつぶやいた。
「メールも届かない」
「海外？」
「ううん、もっと遠いところ。たぶん二度と会えない」
いったいどこに行くつもりなんだろう。ミカは僕の目をまっすぐ見つめていった。
「良介君、私と一緒に来てくれる？」
そして、夕日のほうを指差した。
「お父さんが来たの」

最初は夕日の中の小さな黒い点にしか見えなかった。しばらく見ていると、それが翼をもって羽ばたいているものだと分かった。どんどんこっちに近づいてくる。
「どうする？良介君」
僕は目の前のものにくぎ付けになっている。そんな、まさか。僕は幻を見ているのだろうか。
赤い鱗、大きな角、コウモリに似た翼。そんなゲームの中でしか見たことのないような生物が、こちらに向かって近づいてきていた。
どこからどう見ても——

ドラゴンだ。
「一緒に来てくれるなら、手を握って。そうしたら、お父さんは一緒に連れてってくれるわ」
そう言ってミカは、こちらに手を差し伸べる。
どうする？僕。ミカは、これからありえないところへ旅立とうとしている。
僕の頭の中には、親友の顔やクラスの仲間の顔、両親の顔が駆け巡った。そして、最後に――ミカの笑顔。
僕は、ミカの、白くて小さな手を握りしめた。ミカは泣き笑いのような顔で、微笑んだ。
「ありがとう、良介君」
そして、二人で、迫りくる巨大な影に向き合った。大きい。二階建ての家くらいはある生き物が近づいてくる。もう目の前だ。僕は目をつぶった。
思いがけない優しい手つきで、僕は地面からすくい上げられた。目を開けると、町のはるか上空を、僕たちはドラゴンの手の上に乗せられて飛んでいた。
こうして、僕たちは今までの世界からさらわれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2302ba/

戯れる蝶

2012年1月5日21時46分発行